



－「30歳の成人式」プロジェクト－ 趣意書

2004年以降、日本はこれまでにない人口減少社会に突入しています。少子化とともに高齢化も進んでおり、2010年の段階ですでに人口の4分の1を占める老年人口は、25年後には3分の1以上にまで増えると想定されています。こうした状況は地方を直撃し、過疎化などによって地域コミュニティが崩壊している地域が増えています。

東京への人口の一極集中もまた、地方の少子高齢化を加速させています。近年の東京への一極集中は過去の人口集中期とは異なり、「転入者の増加」ではなく「(地方への)転出者の減少」の方を、とりわけ「30歳前後の転出者の減少」を主な原因としています。地方に帰る人が減っているのです。

こうした事態は、人口の減少だけではなく、町の賑わいがなくなっていくことにも直結しています。過疎化に悩む地域についてはもちろんですが、地方の都市への影響も少なくありません。なぜなら、30歳前後の世代は人口の再生産の主な担い手ですが、同時に、これからの長い時間をその街で生きる彼ら彼女らとその同世代のネットワークこそが、地域活性・地域再生の上で大事な存在だからです。

そしてこのことは、東京圏のコミュニティが抱える問題にもつながっています。世界一の人口集積地であり、国のGDPの約35%を占める東京圏では、住民の代謝が早く、町に対して住民としてコミットメントをするのは「定住」を決めた一部の人間に限られます。また世界のメガシティと比べ、東京圏はどこまでも街が途切れないという広大さを特徴としています。この心理的な区分の薄さもあわせて、結果として都心部では、住民の多さにも関わらず「地元意識」が涵養されづらい状況が続いています。

こうした問題意識の元で、中長期的な地域の活性化に寄与すべく、わたしたちは「30歳の成人式」を企画、プロジェクト化し、その全国での開催を目指していくことを決意しました。

この「30歳の成人式」プロジェクトは、30歳こそが「本当の成人」だと捉え、その成人式を生まれ育った「地元」で行うというプロジェクトです。

本来は強い「同級生のつながり」が年月と共に少しずつ薄れていくことが、地元への思い入れが薄くなるひとつの理由だと私たちは考えています。そして、社会に出た後で、各地に離ればなれになった同級生が集まるような強制力のあるイベントは、実はそれほど多くはありません。

30歳は而立(三十にして立つ)という節目の年です。ほとんどの人間が社会人を経験し、また多くが離れた都市での生活を経験している「30歳」という年齢で開かれるもう一つの成人式は、生まれ育った地元について、あるいは自分が生活をし愛着を持つ町について、その現在・未来の姿を考える絶好の機会になるでしょう。同時に、薄れていく「同級生のつながり」の再構築も期待できます。

地元開催のイベントは町に賑わいを取り戻します。もちろん、商工会議所や地元商店街の皆さんと連携することで、アフターコンベンションの経済的な波及効果も見込めます。初回の開催が成功することで、次年以降の開催にもつながり、毎年の定期集客イベントとして期待できます。

「30歳の成人式」をとおした地元へのアイデンティティのリマインドと、人間関係の再構築ができる場づくりによる「地元」を中心とした同世代ネットワークの強化は、長期的にその町の活性化に大きく寄与します。

このプロジェクトのために私たちは「30歳の成人式推進委員会」を組織し、30歳の成人式の全国各地での開催を呼びかけ、推進していきます。

実際に来年（2012年）の開催に向けて、すでに現在複数の地方で有志が実行委員会等を作り、30歳の成人式の準備を進めています。私たちは推進委員会として、プロジェクトのコンセプトやツール、開催までのフレームの提供やアドバイザーに注力していく予定です。

もちろん、全国各地でこの新しい地域活性化イベントの開催を一緒に目指してくれる方々も募集しています。

このプロジェクトのゴールは、日本全国で、二十歳の成人式と同じように、同級生が一堂に会する「30歳の成人式」が毎年開かれることです。

成長し自立した30歳が、生まれ育った町、愛着のある町に内外から毎年集い、改めてその町を核とした絆を再確認する。そうした光景が全国津々浦々で見られるならば、そこには今よりもより活性化した地域の姿があると私たちは確信しています。

2011年10月
30歳の成人式推進委員会